ジェームズ・デニーの生涯と神学（二）

松浦義夫

序　論

ジェームズ・デニー（James Denney）の生きていた時代、すなわち一九世紀後半から二〇世紀はじめにかけての時代は、スコットランドの教会にとって、どういう意味を持つ時代であったのだろうか。また、どのような課題を担っていた時代であったのだろうか。

この時代、スコットランドの長老主義教会は、二つの主要な問題と直面していた。すなわち、「教会と国家」の問題、特に、「信仰上の独立」を実現するために障害となっていた「国教会体制」に対する問題。もう一つは、「自由主義神学」に対しての、評価の問題である。

元来、スコットランドにおいては、「長老主義」ないし「改革派」と呼ばれる教派的伝統が強く、「国教会」である「スコットランド国教会」（the Church of Scotland）もその伝統に属している。「改革派」の神学的伝統という点を、最も良く表現しているのが、「神にのみ栄光」（soli deo gloria）である。すなわち、キリスト者各自が、自らの主体的信仰において、生の全領域を支配すべき唯一の存在である、主なる神にのみ栄光を帰すべきであるとの信念である。別の表現でいえば、キリスト者の生の全領域において、特に信仰において、支配し裁くことのできる存在は、ただ唯一の神のみであり、他のいかなる者にもその権利がなく、たとえ「国家」といえども、主なる神にのみ帰すべき栄光を自らのものとして求めてはならないし、また、

キリスト者はそれを許すわけにはいかないということになる。そのような伝統のもとにある「国家」にあって、「国家」として求められていることは、キリスト者各自が、自らの主体的信仰において、生活しまたそれを表現する自由を与え保証することである。

ところで、キリスト者の信仰生活の中心を占めるのが、「教会」であり、「教会」において日曜日ごとに行われる「礼拝」である。プロテスタント教会においては、「説教」を中心とした「礼拝」が行われるが、その際最も重要な職務を担うのが、この「説教」を行う「牧師」である。会衆は、この「牧師」を通して、「神の言葉」を聞くわけである。したがって、キリスト者の信仰生活において、「牧師」の占める役割が非常に重要なものといえる。「牧師推薦権」という制度は、その重要な役割を担うべき「牧師」を招くにあたって、「教会」の主体であるべき会衆に対してではなく、ごく一部の世俗の権力者に推薦権を与えるものであり、それを「国家」の法律として定めた制度である。したがって、信仰の自由という点において、この制度は、大きな問題を持っていたわけである。実際に、会衆の意志が無視されるという事件が起こり、「国家」が「教会」に関する事柄に介入するという結果をもたらした。すでに考察したように、この「牧師推薦権」を巡る問題から、トーマス・チャーマーズの指導のもと、「国教会」の福音派の教職者たちが、「国教会」を離脱し、「スコットランド自由教会」(the Free Church of Scotland) を創立したのが、一八四三年のことである。また、同じように信仰の自由を求めて、すでに「国教会」を離脱していた、「救助教会」(the Relief Church) と「合同分離教会」(the United Secession Church) が合同し、「合同長老教会」(the United Presbyterian Church) を創立したのが、一八四七年のことである。

したがって、一九世紀後半のスコットランドにおいては、同じ「長老主義」の伝統にある教会が、「国教会」を含め三つ並び立っていたことになる。そして、我々が考察しているデニー自身との関連でいうと、彼が神学校を卒業し、牧師として、さらに後には、神学者として、「自由教会」の神学校の教授さらには学長として活動する時期と、「国教会体制」の根本的改革を通しての、三つ並び立つ長老主義教会の再合同を求める動きが活発化し、実現に向かう時期とが、ほぼ重なり合ってくる。デニーは、この問題と深い係わりを持つことになるわけである。

この同じ時期に問題となっていた、いま一つの事柄、

それがすでに記したように、「近代神学」ないし「自由主義神学」に対する評価の問題である。この「近代神学」あるいは「自由主義神学」と呼ばれるのは、一九世紀ドイツを中心とする、プロテスタント神学の有力な神学的傾向を指すのであるが、同時期のスコットランドにも流入し、大いに影響をおよぼした。この「近代神学」ないし「自由主義神学」との対話、対決ということが、スコットランドの教会に課せられた、もう一つの課題である。

「自由主義神学」の目差す「自由」とは、いったい何からの自由であろうか。具体的には、「正統主義」の聖書解釈、および伝統的教理からの自由、強制によるのではなく、各自が主体的に真理を受け止め、主張するための自由。ということになるであろうが、実際は、人間中心の、いわば「神からの自由」を密かに宿していたのではなかろうか。しかし、キリスト者の自由は、「人間からの自由」であり、ただ神にのみ栄光を帰すことにより与えられる、他の何者にも侵されることのない自由といえるのではないだろうか。

ジェームズ・デニーの活動した時代とは、スコットランドにおいて、二つの課題を解決する時代であった。しかも、この二つの課題は、結局のところ、「改革派」ないし「長老主義」と呼ばれる教派の神学的伝統であるとともに、キリスト者にとって最も重要な課題である、「神にのみ栄光」(soli deo gloria) 実現のための課題、実は二つにして一つの課題であるといえるのではなかろうか。

このような時代にあって、「時代の子」として、その中心的役割を果たしたのが、ジェームズ・デニーにほかならない。以上のことをまず考慮に置いたうえで、デニーの神学校卒業後の生涯を考察することにしよう。

第一章　牧師として

ジェームズ・デニーの神学校卒業後の生涯すなわち彼の「公生涯」は、大きくいって、三つの時期に区分することができる。すなわち、伝道師さらに牧師としての、一一年間にあたる第一の時期、「自由教会」の神学校において教授となってからの初めの五年間にあたる第二の時期、その後の約一〇年間にあたる第三の時期である。そして、それぞれの時期に、重要な神学的著作が書かれている。具体的にいうと、第一の時期の終わりに書かれた『神学研究』(Studies in Theology)、第二の時期の終わりに書かれた『キリストの死』(the Death of Christ)、そして長老主義教会の再合同に尽

力した、第三の時期の半ばに書かれた『イエスと福音』(Jesus and the Gospel) の三著作である。この三つの神学的著作は、その時期のスコットランドの長老主義教会の動きときわめて密接に関連してくるので、デニーの神学を考察するに際しては、著作と、その著作がなされた同時期の教会の動きを、ともに考察することが必要となり、また、より良く理解するための鍵にもなる。ともあれ、まず第一の時期から考察を行うことにしよう。

一八八三年、デニーは「自由教会」のグラスゴーにある神学校での学びを終了するにあたり、インドのカルカッタにある同教会系の神学校での職務を希望したが、かなえられず、グラスゴーのイースト・エンドにある、「自由教会」系列の「聖ヨハネ教会」(Free St. John's Church) の伝道師として出発した。当時この教会では、ジョン・キャロルが主任牧師として勤めていた。デニーは、日曜学校と、壮年会の読書会の指導を任されていたが、この伝道師の時代に匿名で著した論文が、例のヘンリー・ドラモンドの著書『霊的世界における自然法』に対する批判的論文である、『自然児の兄弟による霊的世界における自然法研究』(On Natural Law in the Spiritual World, by a brother of the Natural Man) という題の論文であるが、その中で、「この書物は、人類を愛する者には宗教的とは言い難く、神学者にとっては科学的とは言い難いもの」との批判をしている。すなわち、科学的でもないし宗教的でもない、科学と宗教を混同したような書物、というように受け取っているわけである。この時期のデニーは、科学の研究領域と、神学の研究領域は、区別むしろ分離すべきであり、科学者も神学者も、自分自身の領域でのみ発言すべきである、という見解に立っていたようである。「科学」と「宗教」と「形而上学」のそれぞれの研究領域を分離し、三者を混同してはならないというのが、いわゆる「自由主義神学」の特に「リッチル学派」の主張であることを考えると、この時期のデニーは、最も自由主義神学的な時期であったということができよう。しかし、間もなく、彼は宗教改革者、特にカルヴァンの立場に急速に接近するようになるが、その時期がこれに続く牧師時代である。

デニーは、一八八六年、「グリーノック中会」において「按手礼」を受け、同年七月一日には、グラスゴーのジョン・ブラウンの娘メァリー・カーマイケルと結婚し、アレキサンダー・バーメイン・ブルースがかつて牧していた、ダンディー近郊のブルーティー・フェ

リーの教会より招聘され、牧師となった。時にデニー三一才のことである。この時より、デニー自身の神学の傾向に変化が見られるようになるが、それには、妻の影響も大きかったといわれている。

ブルーティー・フェリーの自由教会は、ブルースの訓練を受け育てられた会衆からなる教会であり、つまり『一二使徒の訓練』にしたがって教育された教会である。いいかえると、本物の福音を聞く耳を持つ会衆による教会であったといえる。このような環境において、デニー自身も、牧師としてまた説教者として、大きく成長していくことになるわけである。この時期に彼が読むようになったのが、「自由教会」の創立の指導者である、トーマス・チャーマーズの説教と、もう一人忘れてはならないのが、C・H・スポルジョンの説教である。スポルジョンの説教を読むように勧めたのが妻であり、そのことがデニーに対し影響を与えることになったといわれている。この件に関して、『エクスポジターズ・バイブル』シリーズの編集責任者であり、デニーの生涯の友となった、ウィリアム・ロバートソン・ニコルは、次のように記している。(1)「デニーが、より明瞭に福音的信条を語るようになったことに関しては、彼の最も良き理解者であるとともに、誠実な伴侶であった、彼の妻の働きと導きが大きかったといえる。どちらかといえば読むのを毛嫌いしていた彼を、なんとかしてスポルジョンの説教を読むように仕向けたのは、他ならない彼女の働きによるのである。デニーは、この偉大な説教者に対して、心からの敬服をいだくようになるとともに、ますます注意深く、共感を持って、この説教者の著作を読み学ぶようになっていった。彼が、我らの義なるキリストを宣べ伝えるという生涯の決意をするように至ったのも、他の何者にもまして、おそらくこのスポルジョンの導きと影響によるものと思われる」。

この時期に、デニーは、「科学」と「形而上学」を「神学」の領域から分離しようとする「自由主義神学」の立場から、一個の人間の知的営みのそれぞれの分野として、これらを位置づけ、「神学」と対話させることの重要性を認める立場へと変化している。

ブルーティー・フェリーの教会時代に著したのは、先にも記した、『エクスポジターズ・バイブル』シリーズの中の、『テサロニケ人への手紙』(一八九二年)と、「コリント人への第二の手紙』(一八九四年)である。この両書により、「説教者」としてのデニーの名が高まり、スコットランドにおいてだけではなく、英語圏

の国、特にアメリカにおいても広く知れわたるようになった。このことがきっかけとなり、一八九四年四月、アメリカのシカゴ大学神学部より招きを受け、連続講義を受け持つことになった。この講義にもとづき著されたのが、同年出版されることになる『神学研究』である。デニーは、この時、シカゴ大学より「神学博士」の学位を受け、本国スコットランドにおいては翌一八九五年にグラスゴー大学より、一八九六年にはアバーディーン大学よりそれぞれ学位を受けることになる。さらに、一八九七年五月二五日に開かれた「自由教会総会」において、グラスゴーにある神学校の、「組織神学」担当教授として、ジェームズ・キャンドリッシュの後任に選ばれた。母校の卒業生としては、最初の教授であった。したがって、『神学研究』は、デニーの牧師時代の総決算であるとともに、神学者としての出発を画する著作といえる。

第二章　教会再合同に向かって

ところで、この時期のスコットランドの長老主義教会の現状は、どのようであったのだろうか。すでに序論においても記したごとく、一八四三年の「自由教会」の創立、一八四七年の「合同長老教会」の創立以来、「国教会」を含め、長老主義教会が三つ並び立つ状態にあった。デニーがブルーティー・フェリーにおいて牧師をしていた時期は、「自由教会」と「合同長老教会」の間に、再合同への気運がもりあがった時期と重なっている。

共に「国教会」から離脱していながら、この二つの教会が合同できないでいたのは、どのような理由があったのだろうか。

「自由教会」を創立した、トーマス・チャーマーズを指導者とする福音派の人々は、もともとは、「牧師推薦権」には反対していたが、「国教会体制」そのものに対しては、別に反対しているわけではなかった。特に、トーマス・チャーマーズ自身は、頑強に、「国教会体制」を擁護する立場を貫いていた。一方「合同長老教会」に属する人々は、創立以来、「牧師推薦権」に対してはもちろん、「国教会体制」そのものに対して反対の立場であった。彼らの立場を「有志教会論」(voluntarism) と呼ぶがそれは、「教会」が信仰の自由と独立を確保するには、「教会」を構成する信者一人一人が自ら献金することにより、「教会」を運営すべきであり、「国家」からのいっさいの経済的援助を受けないことにより、干渉も受けない、という立場を

貫かねばならない、という考えであった。こういう立場に立ち、「国教会体制」そのものの廃止を唱えていたのである。しかし、「自由教会」の指導者たちは、「国家」による経済的援助を受けても、信仰の自由と独立を確保することは可能であり、また「国教会体制」そのものの意義を大いに評価して、「反有志教会論」の立場に立っていたので、同じく「国教会」から離脱してはいても、再合同ができずにいた。しかしながら、「自由教会」が「国教会」から離脱し、教会と俸給を「国家」に返上し、「維持基金」を創設して、事実上は、「自給教会」として出発することになり、理論的には「反有志教会論」の立場にあっても、実際的には「有志教会論」の立場を実践せざるをえなくなり、「自由教会」の人々も、次第に、信仰の独立と経済的独立の不可分性を認識することとなり、「合同長老教会」の立場に近づいていった。

両教会は共に、「牧師推薦権」に反対し、運動を進めるうちに、「国教会」内部においても、「牧師推薦権」をめぐってのトラブルがあいついで起こるようになり、ついには、「国教会」が自ら議会に願い出て、一八七四年、スコットランドにおける長老主義教会の長年にわたる論争の焦点であった、「牧師推薦権」の制度を廃止することになった。「自由教会」と「合同長老教会」は、さらに「国教会体制」そのものの廃止を求めて、共同の運動を進めた。このような時にあたって、他の神学的な要因もあって、両教会において、一八九〇年代後半に、合同の気運が高まっていった。

デニーが、ブルーティー・フェリーで牧師をしていたのは、まさにこのように両教会の合同の気運が最も高まった時期である。

「自由教会」と「合同長老教会」の接近は同時に、それぞれの教会を代表するような神学者の接近をもたらした。「自由教会」の代表的神学者は、もちろん我々の考察している、ジェームズ・デニーその人にほかならない。「合同長老教会」を代表する神学者は、ジェームズ・オアー（James Orr）である。一八四四年四月一一日生まれのオアーは、デニーと同じグラスゴー大学の卒業生であり、エドワード・ケァードに師事した点でも、デニーと共通している。オアーは、牧師としての職務に努めるとともに、神学研究にもとりくみ、特に「自由主義神学」の批判的研究にすぐれ、一八九三年には、代表的著作である『キリスト教的神観と世界観』（the Christian View of God and the World）を著し、同年エディンバラにある「合同長老

教会」の神学校に、「教会史」担当の教授として招かれた。

デニーは、オアーの「自由主義神学」に対する批判的研究に、大いに負っているところがあり、『神学研究』を著す際に最も多く参考にしているのが、オアーの研究である。この二人の神学者は、一九〇〇年に、「自由教会」と「合同長老教会」が合同するとともに、グラスゴーにある、元「自由教会」の神学校において、共に教鞭をとることになるが、デニーは「新約神学」の教授として、オアーは「組織神学」の教授として、学問的にも親密な関係を保ち、生涯手を携えて、牧師の養成に努めることになる。

第三章　聖書の解釈をめぐって

ロバートソン・スミスの事件以来、「聖書の無謬性」をめぐる問題は、スコットランドの長老主義教会、特に福音派の流れにある教会、具体的には、「自由教会」と「合同長老教会」において、論争が続けられていたが、この時期に一応の解決を見るのである。

一八九〇年、「自由教会」の「総会」において、デニーの師である、ブルースと、『エクスポジターズ・バイブル』シリーズの、『コリント人への第一の手紙』の著者でもあるマーカス・ドッズに関しても、このことが問題となり論議され、結局「教会の信仰基準にはずれるものではない」との決議がなされ、「自由教会」内においては、表面的には、一応の決着がついたように思われた。しかし、その後も何年にもわたって、各中会レベルでは論議が続いていた。デニー自身も、何度か論争の焦点となり、発言を求められることがあった。一八九一年の「総会」においては、次のように発言している。(2)「神の言葉は、人々の魂を救う神の力を、誤りなく伝達する。これのみが、私の信じる聖書の無謬性であります。権威（authority）とは著者性（authorship）のことではありません。神は、聖書に書かれている事柄が、御自身に属する事柄であるという証明はされます。しかし、ある書物を書いた人間が、その書物の著者である、という意味でいえば、神は聖書の著者であるとは、いえません。そのように受けとるのは、ナンセンスなことといえます」。このような発言を見ると、デニーは一部の人々から、「自由主義」だとか、「聖書の無謬性」を信じないといった誤解をされることも、理解できる。また、一八九四年の四月、アメリカのシカゴ大学神学部においてなされた講義の際も、その中の「聖書」に関する講義がかなり論議を

起こしたらしく、『神学研究』として出版された時点では、誤解を受けないように書き改められたものとなっている。したがって、デニーがいかなる講義をしたのかは、推測するより仕方がないが、この時も、「聖書の無謬性」に関するデニーの考え方が、論議を起こしたと考えられる。表面的にはもう解決が着いているように見えていても、依然として不信をいだく人々も、多かったのであろうと思われる。特にデニーの場合、神学校の教授として招かれたということもあり、一層問題となったのであろう。

次に記すエピソードは、『神学研究』が出版され、すでに一〇年後の一九〇四年に起こった出来事であるが、『神学研究』以来一貫している、デニーの「聖書観」を知るうえで、良い参考になるとともに、『神学研究』自体の理解の一助ともなり、また、反対者たちの考えていた「聖書観」も知ることができるものであるので、ここで取り扱うことにしよう。(3)

一九〇四年一二月、「合同自由教会」（「自由教会」と「合同長老教会」の合同により成立）の「グラスゴー中会」における、月例会議の席上、次のような動議が、ジョン・バカン牧師により提出された。「現今、我らの信仰箇条に対してなされている、諸攻撃のことを考えますに、この際、我が中会といたしましては、総会に対して、聖書の無謬性に関する我らの信仰と、今日に至るまで受け入れられています諸教義の再確認を建議することを提案します」。そして、この動議を提出するのは、党派心からではなく、自らの牧する教会の会員の中に、この問題に対する事柄において、心を痛め、ついには教会を離脱しようとする者が出た旨を語った。ジョン・バカン牧師は、説得に努めたのだが、「教会の信任を受けている神学校の教師の中に、詩篇一一〇篇の著者がダビデではないとするような人物がいる状態で、そんな教会に留まることが、どうしてできるのですか」、との意見に対して、返答に窮したというのであった。彼としては、中会において適切な判断と助言が得られるなら、動議を提出することをとりやめてもよい、というものであった。長い論議の末、発言を求められたジェームズ・デニーは、「今問題になっている、詩篇一一〇篇の著者がダビデではないと語ったというように、受けとられている神学校の教師とは、私自身のことであると考えます」。と語った後、彼自身の聖書解釈と「聖書観」を明らかにする機会ともなった。

問題となっている聖書の個所は、『マルコによる福

音書』第一二章三五節以下の記事ないしは、その平行記事だと思われるので、具体的に聖書を引用し、それに対するデニーの解釈を見ることにする。問題の個所には次のように記されている。「イエスが宮で教えておられたとき、こう言われた。律法学者たちは、どうしてキリストをダビデの子だと言うのか。ダビデ自身が聖霊に感じて言った。『主はわが主に仰せになった、あなたの敵をあなたの足もとに置くときまでは、わたしの右に座していなさい』。このように、ダビデ自身がキリストを主と呼んでいる。それなら、どうしてキリストはダビデの子であろうか」。

ところで、例の教会員は、イエス自身の言葉として記されているこの個所で、イエスが教えているのは、詩篇一一〇篇の著者がダビデである、ということだと考えるのである。イエス自身が詩篇一一〇篇を引用し、「ダビデ自身が聖霊に感じて言った」と発言しているのだから、詩篇一一〇篇の著者がダビデであることが証明された、と理解するわけである。聖書は一字一句誤りなき神の言葉であり、しかもイエス自身の言葉であるにもかかわらず、それを否定するような人物が、教会の信任を受けた神学校の教師をしているような教会に留まるなら、自らの「聖書の無謬性」に対する信仰を否定することになる。というように、考えたわけである、と思われる。

これに対して、デニー自身の意見は、要点をまとめて記すと次のようになる。「キリストがこの個所で教えようとしているのは、詩篇の著者が誰であるかという事柄に関するものではない。当時の人間なら、誰もがかたったであろうと思われる仕方で、詩篇を引用し、その著者に関して言及しているだけである。この個所でキリストの教えようとしているのは、詩篇の著者が誰であるかということではなく、自分自身がどういう存在なのかということである。すなわち、自身がキリストであり、そのことは、自身とダビデとに特別な関係があることによるのではなく、自身と神との間に特別な関係があり、そのことによりキリストである、ということである。これ以外のことをキリストは、この個所で教えておられるわけではない。私自身としては、学問的研究より得た確信により、問題の詩篇は、ダビデの時代に書かれたものではないと考えている。このように考えているからといって、キリストと父なる神との独一無比な関係に対して、懐いている私の確信は、いささかも脅かされるものではない。もし総会に対してなんらかの働きかけをして、教会の信仰箇条を再確

認しようとするのであれば、本来聖書が意図されている意味では読まないようにとさせることを目的として、総会に再確認を要請することにもなりかねないので、反対の動議を提出するつもりである。聖書の無謬性ということを、詩篇一一〇篇の著者がダビデである、という、当時の人々の考え方が誤りないというような意味で受けとっている人々がいる」。

このようにデニーが発言した段階で、この件に関する審議は打ち切ることになったが、この機会にデニー自身の「聖書観」を述べることとなった。彼は次のように発言している。「私自身としては、聖書が無謬であるという信仰を告白することは、勿論可能なことである。もし、誰でも、自らの思いと心をかたむけ、謙虚にしかも誠実に、聖書の教えと導きに、聞き従おうとするならば、聖書は、謬りなくその人を神に出会わせるとともに、その人に、神の知恵と永遠の生命を与えてくれる。しかし、文字で書かれている表現が正確なものであるとか、史的事実として謬りない事柄だとか言う点に関して言えば、まったく次元の異なることであり、教会は、そのような意味での無謬性を信じているわけではない。したがって、教会が信じているのではない事柄を、あたかも信じているかのような誤解を与える表現を、採用するのは、無益なことだといえる。教会が聖書の無謬性を信じる、という真の意味は、人々が聖書に自らを委ねるならば、聖書は謬りなく、その人々に神の知識を与え、その人々を、イエス・キリストにある永遠の生命へと導いてくれる力のあるものとして、聖書を信じる、ということである」。

さらにここで補足して、デニーの「聖書観」を、特に問題の詩篇の解釈との関連で記すなら、次のような説明が可能であろう。すなわち、ここでデニーが主張しているのは、詩篇の著者がダビデであるかどうかという問題と、「キリスト」という存在を、イエス自身はどうとらえていたかという問題は、次元の異なる問題であり、ここでは、「キリスト」という存在に対するイエス自身の考えを述べるということが、第一の主題である、ということである。そして、この考えを論証するために、イエスは、当時の人々と同じやり方で、詩篇を引用しているということである。また、学問的研究の結果、問題の詩篇の著者がダビデではないことが明らかとなった今日、史的事実に反するゆえ、このような引用は無意味なものといえるのか、というと、そうではなく、このことは別の次元に属する事柄として解釈すべきである、ということである。このような

引用の仕方を見ることによって、当時の論証の仕方、特に旧約聖書を引用する際の手法がわかり、今日の我々が考えるより、かなり自由に引用しているということが理解できるとともに、新約の時代では、このような論証の仕方が、「キリスト」に関する事柄を宣べ伝えるのに、最も有効かつ適切な表現と看做されていたということがわかる、ということである。したがって、「聖書の無謬性」ということは、旧約聖書の引用が今日の我々の目から見て、史的に正確なものであるかどうかという問題とは、一応次元の異なる問題として受け止めることによって、かえって聖書が本来伝えようとしている事柄を、より的確に把握できる、というのが、デニーの考えだと推測できる。

なお、デニーの「聖書観」に関するより詳しい考察は、別の機会に取り扱うこととして、再び、デニーの神学者としての出発を画する著書である『神学研究』に戻って、さらに考察を進めることにする。

第四章　『神学研究』をめぐって

デニーがシカゴ大学で行った講義のうち、「聖書」に関する項目は書き改められ、その他の部分はそのままの型で『神学研究』として出版されたが、この著書の内容は、「自由教会」の中の「超正統主義」(ultra orthodox) の人々も歓迎したとされる。(4) しかし、それでもやはり一部には、「聖書」の個所が問題とされた。講義の行われたアメリカにおいては、どちらかといえばかなり「保守派」と見られる神学者のストロング (A. H. Strong) でさえ、「聖書」の項目も含め、『神学研究』から多く引用していることなどから考えても、「超正統主義」といわれる人々が、どういう人々であるかは、およその見当がつく。事実、この『神学研究』は、「自由主義」と「超正統主義」に反対し、今日の標準からいっても、まことに堅実で、得るところの多い作品といえ、宗教改革者、特にカルヴァンやスコットランド教会の父であるジョン・ノックスの、思想および神学を、今ここで (hic et nunc) 再び生かそうとしているように考えられる。いわば、デニーの牧師時代の総決算であるとともに、自らの考える、スコットランドの長老主義教会の再合同のための神学的出発点を示そうとしたのではなかろうか。また、扱われている項目が、「キリスト論」と「贖罪論」を中心としているが、一応組織的に神学の重要なテーマをとりあげており、「神学要綱」(compendium) の型をとっているので、デニーの神学の全体のパースペクティブ

を理解するのに、きわめて重要な著作といえよう。また、当時のスコットランドの神学を代表する神学者たちが、このような「要綱」とか「概論」にあたるものを、ほとんど書いていない点からも、ある意味で、スタンダードな作品ともいえよう。

『神学研究』は全一〇講からなり、英語の原文では各講約二五ページであるから、全体でも二五〇ページ程度のものであるが、内容的にいって、無駄な部分の一切ない、簡潔明瞭でしかもその背後には、著者の深い信仰と道徳的圧力の溢れた作品といえよう。学問的でありつつ、しかも、良い意味で説教調な文章、表現自体も、引き締まった名文と呼ぶにふさわしいものである。デニーの著作全般に対していえることであるが、内容的に見て素晴らしいものであるということは、無論であるが、それを表現するのにふさわしい文章を用いているということである。また、学問のための学問というのではなく、「伝道に役立つ」神学、「説教に役立つ」神学を目差したものである、ということである。デニーの神学を称して、ある研究者は、a preachable theologyと呼んでいるが、たしかに、そう呼ぶにふさわしいものである。(5)

『神学研究』の各講の表題を示すと、次のようになる。

第一講　神学という概念
第二講　イエスの自己証言
第三講　使徒的キリスト論
第四講　人間と罪
第五講　罪に対するキリストの働き　(1)
　　―新約聖書の贖罪論―
第六講　罪に対するキリストの働き　(2)
　　―誤った贖罪論の例―
第七講　高挙におけるキリスト
第八講　教会と神の国
第九講　聖書
第十講　終末論

表題からもわかるように、「キリスト論」と「贖罪論」を中心に、神学の重要なテーマを組織的に扱っている。また、「聖書」を「教会論」の後に置いているが、これに関していえば、デニー自身の信仰的歴史、先の拙論でのべた表現でいえば、彼のガイストリッヒ・ハイマート、すなわち、彼が「キャメロン派」の流れに属していることを考えると、興味深いものがある。すなわち、「キャメロン派」とは、「名誉革命」の時、「スコットランド国教会」の再生のあり方に、反対し

た人々であるが、この時「国教会」で裁可されたのが、『ウェストミンスター信仰告白』である。したがって「キャメロン派」の人々は、『ウェストミンスター信仰告白』にも批判的であったと想像できるが、デニー自身もこの信仰告白には批判的であり、むしろ、この信仰告白が裁可される以前に、かつてスコットランドで使用されていた、ジョン・ノックスらの起草による信仰告白に対して、より好感と共感を懐いていたものと考えられる。そのことは、この「聖書」の項目の位置にも現れている。デニーにとって、宗教改革者、特にカルヴァンとノックスは、つねに彼の神学の出発点であったと考えられる。

『神学研究』は、デニーのいわば三部作の第一の作品であり、この後に『キリストの死』と『イエスと福音』が続くのであるが、後の二つの作品は、『神学研究』の中の「贖罪論」と「キリスト論」を、さらに詳細に論じたものである。この三部作が、デニーの神学体系を構成していると考えると、その中における『神学研究』の占める位置は、それ自体で「要綱」であるとともに、「最初に（pro-）語られるべき事柄（legomena）」という意味で、「神学序説」（prolegomena）にあたる、というように見ることもできよう。いずれにせよ、この著書において、デニー自身の神学的認識方法と、取り組みの姿勢などが、全講を通じて表明されている。

第五章　神にのみ栄光—soli Deo gloria

すでに序論でも記したように、ジェームズ・デニーの生きていた時代のスコットランドの長老主義教会には、「教会と国家」の問題と「近代神学」ないし「自由主義神学」の評価の問題という、二つの主要な問題があり、しかも、この二つの問題が、実は二つにして一つの問題であり、このことを克服するのが、教会的また神学的課題であった。デニー自身も「時代の子」として、この課題と取り組むのであるが、彼の『神学研究』も、その最初の取り組みの成果を示している著作といえる。

デニーの属する「自由教会」は、もと「国教会」内の「福音派」と呼ばれる人々が、「国教会」を離脱して創立したものであるが、この「福音派」の人々が対立していた相手は、「穏健派」（Moderates）と呼ばれる人々であった。この「穏健派」は、啓蒙主義運動の影響を幅広くうけ、表面的には正統的教理を保持していたが、ほとんど教理には重きを置いていなかった。

したがって、「穏健派」の説教は、「キリスト論」あるいは「贖罪論」といった事柄には、ほとんど触れず、むしろ倫理的ないし道徳的徳目についてのものであった。それに対して、「福音派」は、伝統的教理、特に宗教改革的教理を生命的なものと看做していて、熱心に説教するとともに、伝道にも力を入れていた。このような状況のなかにあって、広く「穏健派」の人々から受け入れられていたのは、「自由主義神学」であった。正統的教理からの自由、倫理的ないし道徳的事柄が中心となっているという、この派の神学の特質が、彼ら「穏健派」にとって、受け入れられやすかったのは、容易に想像のつくことである。

このことからもわかるように、「牧師推薦権」をめぐる、「福音派」と「穏健派」の戦いは、「自由主義神学」の評価をめぐっての両派の戦いでもあったのである。この時期のスコットランドの長老主義教会における、二つの問題は、この意味で、結局二つにして一つの教会的神学的問題であったと、いえるのではなかろうか。デニーの『神学研究』も、この戦いの中にあって著わされた、神学的な「戦いの書」であったと、見ることもできよう。しかし、ただ単に派閥的ないし党派的な争いのためにのみ著わされた、というようには、決していえない。デニーにとっては、「自由主義神学」が、誰によって受け入れられているか、ということは、いわばどうでもよいことであって、むしろ、「自由主義神学」がはたして、「真理」に対して、忠実であり誠実であるかどうかということが、ただ一つの問題であった。「自由主義神学」が「神の真理」に仕えるものなのか、あるいは「人間中心主義」に仕えるものなのか、言い換えれば、「神にのみ栄光」を求めるものなのか否か、ということを問題として、戦いを挑んでいるのである。

では、デニー自身、具体的にはどのように、「自由主義神学」を評価しそれとどう対決しているか。彼の神学に対する姿勢、認識方法などが、この『神学研究』全講を通じて記述されているが、特にこの問題について、集中的に論及されているのが、「第一講」である。したがって、この講の論述に従って、彼の「自由主義神学」に対する評価を考察していくことにしよう。デニーは、まず「神学」の定義から、論述を始める。(6)

「神学とは、神に関する教説であり、組織神学とは、その教説を系統的に記述する作業である。しかし、神に関する教説は、その事柄の性質上、我々の持つ知識全体と何らかの関連を持っている。それは、我々の生

きているこの世界が、神により創られ、神に依存しているからである。したがって、神に関する教説を系統的に記述する場合も、神を媒介にして観察される世界に対する観点を、含むことになる。すなわち、我々の生の領域全体を眺めることのできる概念あるいは原理を、たとえ概略的なものとしても、内包しているものでなければならない。ところで、我々が扱おうとしているのは、厳密には、神学ではなく、キリスト教神学である。すなわち、キリスト自身にまで溯ることのできる、神に関する教説を扱うわけである。我々キリスト者の理解しているところによると、キリストは、神に関する唯一しかも完全な知識を所有しており、しかもキリストの弟子たちをして、その知識に与からせた。したがって、我々にとって神学とは、このキリストにより与えられた、神に関する知識を、その中に、何らかの世界観をも、少なくとも概略的には内包するものとして、科学的（学問的）に系統立てて掲示する知的営みのことである。キリスト教は、啓示された形而上学ではないし、ましてや、啓示された（自然）科学ではない、という表現は、一見正しいように受けとれるが、キリスト教の所有している真理というものは、我々の知的活動の一部分にのみ封じ込めるわけにはいかない。したがって、よくいわれているようには、形而上学的であることを、恐れていてはならない」。

このようにデニーは、「神学」を定義しているが、ここには明らかに、「リッチル学派」に属する人々の「神学」に対する態度と理解に対しての批判が認められる。デニーは、「リッチル学派」の「神学」をどのようなものと理解していたのであろうか。彼自身の記述によるとつぎのようになる。(7)

「現代、ある意味で最も影響力のある、また最も興味深く、ある点においては、我々にとって最も魅力的な神学は、リッチルその人の名をもって呼ばれている学派に属する人々の神学である。リッチルによれば、宗教と形而上学とは、まったく別々のものであり、神学は宗教とのみ関連を持つ。また、キリスト教的神認識は、科学的認識とは異なっている。科学的に、言い換えれば、理性による認識によって導き出された諸原理に基づく、自然神学とは何らの関わりも持たない。キリスト教的神認識は、神によって、ただキリストにおいてのみなされた、啓示による認識である。我々に与えられた啓示の確かさと、その啓示による神認識の確かさは、科学的な事柄ではなく、むしろ宗教的な事柄である。啓示および神認識に対する我々の判断は、

誰に対しても無差別に有効妥当性を持つ、理性的ないし理論的判断に基づくものではなく、幸いにも信仰を持つに至った、我々にとって価値があるかどうかという、価値判断に基づくものである。したがって、厳密に信仰の領域に属する事柄である。したがって、誰に対しても無差別に有効な、科学的妥当性は、問題とはならない。したがって、神学それ自体も、宗教の領域をのみ扱うべきであって、科学的に理解されるべき自然ないし世界を扱う必要がない。宗教の占める領域と、科学の占める領域は、まったく異なるのであるから、神学者は宗教の領域、科学者は自然の領域に留まり、それぞれの領域を守り、これを越えてはならない。このようにして、それぞれの領域を守ることによって、出会うこともなければ、したがって衝突することもない」。

このように、デニーは「リッチル学派」の神認識の方法と神学に対する理解をとらえ、問題点を一つ一つ指摘し、批判していくが、内容的に大きくまとめると、自然と神学との関係、形而上学と神学との関係、という二つの点にしぼることができる。

まず、研究の領域を分離すべきであるとの主張に対しては、次のように批判している。(8)

「信仰者は、信仰者としての生活を、自分を取り巻く自然の中で営む。科学者ももし信仰をもっているなら、信仰者としての同じ課題を担っている。我々の現に生活している、自然あるいは世界は、一つの全体を構成しており、信仰者である我々は、この世界が、神により創造され神に依存していると考える。また、人間の心というものも、一つの全体を構成しており、我々の行う認識作用、あるいは知的活動も、一つの全体をなすものであるから、宗教的認識であれ、科学的認識であれ、それぞれまったく関係のない別々のものであるとして、そのままで済ますわけにはいかない。一つの全体を構成する自然の中に生活している我々は、その中で我々が持つすべての認識を、一つの全体を構成するものとして、それぞれの正しい場所に位置づけることが必要となる。神学の担っている重要な任務は、このような様々な、自然に対する我々の認識を、無視するのではなく、それらが、啓示によって与えられる神認識と、どのような関係にあるのかを明らかにし、たとえ、概略的なものであれ、それらの諸認識を、神概念の下に、正しく位置づけることである。真理は、科学的であろうと、宗教的であろうと、本来一つのものである。ある事柄に対して、両者の認識が異なると

いう場合があるとすれば、それは、それぞれの研究領域が異なるから、というだけではなく、どちらか一方だけが真理である場合、あるいは、どちらも真理ではない場合、というようなことが考えられる。したがって、宗教と科学をまったく分離してしまうということは、宗教と真理をも分離してしまうことにもなりかねないのではないだろうか。そしてついには、真理を愛する者たちの間では、宗教は死に絶えてしまう、ということにもなりかねないのではないだろうか。また信仰を持つ科学者は、信仰者としての生活と科学者としての生活という、いわば二重生活を送らねばならないのではないだろうか。科学者も神学者も、真理に仕えるという、まことに困難な課題と取り組まねばならない」。

このように、「科学」と「神学」を分離してしまうことから生じる問題を指摘するとともに、キリスト教の神認識にとって、「啓示」が本来持っている「客観性」の重要性を示していく。(9)

「我々が持つ、特にキリスト教的なものとしての神概念は、キリスト自身に負うものである、ということは、勿論のことといえる。御子における啓示によらなければ、我々は御父を認識することはできない。我々は、神を、神であり、我らの主イエス・キリストの父と呼んでいる。これが、我々が神に対して持っている知識の中核である。また、神を言い表すのに、我々にとって最も親しみがあり、また適切な言い表し方である。しかし、そうだからといって、このことによって力を得て、人間の心が今までこの啓示以外の根拠に基づいて、神の存在を信じる信仰を、説明し証明しようとして、捜し求めてきた様々な議論を、信じるに値しないものとしたり、これらの議論は、神学においていかなる場所も持たないし、何ら考慮する必要がない、というように看做してしまうのは、はたして、賢明なことあるいは適切なことといえるだろうか。これらの議論にしたがったところで、我々は、結局のところ、キリストの啓示において与えられる、神の概念には到達することはできない、ということは認めるとしても、だからといって、キリスト教的神概念は、これらの議論とは何ら関係を持たないし、またこれらによって支持される必要もない、としてしまったり、また持って生まれた宗教的意識や直感というものに対する、人間の心のあれ程の取り組みを、純粋で完全な宗教にとっては、まったくの無関係な事柄として、単純に片付けてしまっていいものだろうか。私自身には、そうは思

えない。このように、リッチル学派の大部分の人々が、これら哲学的議論に対して懐いている軽蔑の念が呼び起こす結果は、神学がより純粋にキリスト教的なものとして保たれる、というよりはむしろ、神学がその堅固さと客観的価値を失ってしまうということになるに違いないと、私は確信する。キリストが来られる以前においても、神は、人類に対して、自らの存在の証明をなさずにおかれたわけではない。ただ旧約聖書の選民においてのみばかりではなく、全ての種族において、天の下の全ての場所において、神に関する証明がなされたのであり、今もなお、福音の啓示以外に、より広い意味での証明が存在するのである。神学者の仕事とは、今やキリストが来られたからには、これらの証明はもはや浅薄なものとなってしまったとして、葬り去ってしまうことではなく、それらを理解し解釈して、キリストとの正しい関連に位置づけることである。いわゆる、神の存在証明と呼ばれる、すべての議論について注意すべき本質的な点は、次のことである。すなわち、これらの議論が単なる幻想ではないということである。これらは、自然において、人間自身において、あるいは、自然と人間の相互の関係において、我々が直接的にあるいは間接的に受けとる、何かしら神的なものに対する印象を、知性でもってどう解釈すべきか、ということに対する様々の試みである。これらの議論が意図されているところは、そういった印象そのものを創り出すことではなく、受けとった印象を解釈するということである。そして、これらの諸印象は、神によりキリストにおいてなされた啓示によって、我々のうちに生み出される印象と比べると、重要性においては劣っているとしても、現実性においては同等のものなのである。また、解釈自体が間違ったものであったりすることも、あるかもしれないが、その点に関しては、キリストの啓示に対する解釈に対しても同じことがいえるのではないだろうか。だいじな点は、どちらの場合にも公平な判断が下されるべきである、ということである。そして、キリストにおいて完成されたものとなる啓示が、広く知られており、しかも多くの批判にさらされてきた、神の存在証明をめぐる諸議論というかたちで解釈されてきた、それら、いわばより覆われた状態の啓示から、絶縁されてしまうのではなく、それらとの現実的関わりのうちに示されるべきなのである。キリスト教神学は、他の学問とは一切関連を持たない、知的活動の切り離された一分野であるのではなく、神に関する教説であるからこそかえって、たと

え完全で歴史的である啓示からは離れたものであっても、人類の心に力を持って迫ってくる、神に関するそれら全ての印象や直感のたぐいに対する、正当な場所と認識を持たなくてはならない。宇宙論的とか、目的論的あるいは、存在論的というように呼ばれているこれらの議論の内容を理解していなければ、誰もキリスト者たりえない、などといっているわけでは決してないし、ましてやこれらの名称そのものを理解していなければ、誰もキリスト者ではないといっているわけではない。しかし、いえることは、それらすべての批判にもかかわらず、これらの議論は事実、神と神の御業によって、人類の心に植えつけられた様々な印象、言い換えれば啓示を、多かれ少なかれ適切に解釈しているということである。こういう理由で、これらの議論は、一律に締め出してしまうべきではなく、誠実に取り扱われ、キリストの全き真理との本来あるべき関係において、示されるべきである。これらによって誰も決して宗教的にはならないからといって、これらの議論を一笑に付すのは、知性に反する行為だといえよう。これらの事柄にとって、当然の権利として要求されることは、これらの事柄のなかに、神に関するなんらかの真理が存在するということ、特にこれらの事柄が組み合わされた時に、その中にキリスト教が前提としており、それなしには立ち行かない、なんらかの真理が存在するということに、考慮をはらい、正しい形態のキリスト教神学においては、なんらかの有機的な位置を与えられるということである。キリストにおいて、我々が、神に関して知り得る事柄、知らねばならない事柄の全てが与えられている、というだけでは、また、我々がキリスト者として神という場合は、キリストにおいて啓示された人格的存在以外の何者をも意味しない、というだけでは、安全とはいえない。神に関する概念は、我々の認識する全ての事柄と、本質的に関わってこざるを得ないし、我々の認識というものは、すべてその内になんらかの意味で、啓示といえるようなものを、必ず持っているゆえ、我々の神学にとって貢献するものなのである。

私自身が今まで戦ってきている流れの、行き着いた極端な結果は、リッチルに対する信奉者の内の一人である、ヘルマンの見解のなかに見ることができる。彼によると、宗教的信仰に対する刺激を支える限りにおいては、我々の持つ世界観が、有神論的であろうと、汎神論的であろうと、あるいは唯物論的であろうと何の問題もない、全体としての宗教的性質に影響を与え

るものではない、ということになる。リッチル自身、同じように、神学における、科学の放棄、事実上は理性の放棄のすえ、神について言及するに際して、最もリアルな実在というのではなく、信仰者の実用的目的の達成のための助成概念（help conception）とまで言ってしまった。神とは、言い換えれば、キリスト教的な観念に基づく人類の主要目的達成のための、必然的仮説ではあるが、科学的には、たとえば自然や歴史を解釈するさいの、その相対的立場からいって、神というようなものが存在するか否かは、未解決の問題のままとして残されるかもしれない、ということになる。このように、宗教的事柄と理論的事柄とを分離して、それぞれに、理性と信仰という引き離された領域をあてがうという企てをなすことによって、原理的に結果として起こってくるのは、真理に対する裏切り行為ということになる。それではまさに、理性に対する無関心、あるいは懐疑の上に宗教的確実性を築こうとする企てにほかならない。そして、理性は、信仰にとって本質的に必要な何物かを、自らの支配下に保護することによって、つねに復讐をしてくるのである」。

このようなデニーの表現を見ると、彼が、いわゆる「自然神学」を認めているかのようにも受け止めることができる。しかし、デニーの真の意図は、むしろ「自然」あるいは「世界」というのは、神によって創造され、また神に依存しており、しかもそのなかで「人間」が生きるべき場所であるということ、すなわち「人間」の生の領域であるということを指摘すると同時に、神の支配の対象であるということを明らかにすることにあると思われる。すなわち、神御自身が、すべての主体である、ということである。したがって、キリストにおける啓示以外の方法によっても、神の御旨にかなう処と時において（ubi et quando visum Deo est）自らを啓示される、ということである。このように、我々の生の全領域において、ただ神にのみ支配者としての主体を求め認めるということ、言い換えれば、ただ神にのみ栄光（soli Deo gloria）を求めていくということが、神学という学問のあり方をも決定するわけである。神を認識するという場合にあっても、その認識の主体は、我々自身ではなく、神御自身が主体として我々に臨まれることによって、神を認識することが可能とされる、ということである。いわゆる、「自由主義神学」あるいは「近代神学」のなかでも、「リッチル学派」の神認識に対する考え方、特に「価値判断」と呼ばれるものの占める役割と位置に対する

考え方に従えば、神を認識するという場合も、その主体は、当然我々自身ということになるであろう。主体的ということがいつの間にか主観的ということに摩り替えられてしまう、ということが起こらないという保証はないのである。現に、「リッチル学派」の人々の神学には、そういった傾向が濃厚に認められる、ということを、デニーは指摘しているわけである。我々の生の全領域において、あくまでも神が主体として我々に対して臨まれる、ということを、自らの神学的思索の立脚点として、そこから出発し、またそれを目標とするということ、これこそがデニーの目差していることといえるのではないだろうか。

デニーはさらに、「リッチル学派」の神学の持っている、様々な問題点のうち、特に「歴史」および「形而上学」に対する同派の人々の考え方に対する批判を、述べているが、このことに関しては、さらに稿を改めて考察していくことにする。

（以下次号に続く）

注

(1) Walker, T. H.; Principal James Denney, D. D. Edinburgh. 1918. p. 51.

(2) Moffatt, J.; Letters of Principal James Denney to his family and friends. Edinburgh. 1920. p. 23.

(3) Walker, *op. cit.*, p. 89.

(4) Ibid., p. 88.

(5) Sell, Alan P. F.; Defending and declaring the faith. Colorado Springs. 1987. p. 195.

(6) Denney, J.; Studies in Theology. London. 1904. p. 1

(7) Ibid., p. 2.

(8) Ibid., p. 3.

(9) Ibid., p. 5.